

---

# 夏の風

坂田銀時

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の風

### 【Nコード】

N6585V

### 【作者名】

坂田銀時

### 【あらすじ】

俺は、のんびりと夏休みを満喫していた。だが、友達から掛ってきた一本の電話が今までグータラに過ごしてきた俺の人生を180度変えた。これから起きる、波瀾万丈な出来事が俺の身に降りかかるのであった。

## プロローグ

俺は、のんびりと夏休みを満喫していた。だが、友達から掛ってきた一本の電話が今までグータラに過ごしてきた俺の人生を180度変えた。これから起きる、波瀾万丈な出来事が俺の身に降りかかるのであった。

オリジナル小説の第二弾となる「夏の風」。今回のオリジナル小説「夏の風」は、あらすじを簡単にまとめて書いたプロローグだけではなく「夏の風」の本編の公開は、2011年の秋ごろになると思います。

製作

夏の風製作委員会

オリジナル小説製作委員会

## 第一話

雲崎村に住む高校二年生の俺は、何も変わらないだたグータラに自分の家でのびのびと夏休みを過ごしていた。そんな時、パソコンで動画共有サイトを見ていたら家の電話機が鳴ったので、俺は急いで電話機があるところまで行き電話に出た。

「もしもし、どちら様ですか？」

「よ！ 元気にしていたか？」

電話をかけてきたのは、俺の親友の久保だった。

「なんか用か？ こっちは今、眠たくてしかたないんだ。用があるなら、30文字以内にまとめて言ってくれ」

「なあ、今日年に一度の祭りがあるの知っているだろう」

「今日、祭りとかあったっけ？」

「あんな、お前この村に何年住んでるんだ？ 今日、須知神社の年に一度の夏祭りの日だろうが」

「ああ、そうだったな。すっかり、忘れていたよ」

須知神社とは、この雲崎村ができる以前からある由緒正しき神社で毎年、夏と冬に村から邪悪なものを追い払うためにやるお祭りで、毎年盛大に行われる祭り。その祭りのことを俺は、きれいさっぱり忘れていた。

「ようやく思いだしたか、それくらい覚えておけよ。それでさ、今日の祭り一緒に行かないか？」

「どうやら、須知神社の夏祭りに一緒に行かないかという誘いの電話だった。」

「行かないとダメか？ 俺今、金がなくて困っているんだよな」

と金がない振りをして、誘いを断ろうとする。

「大丈夫だって、そんなに金使う事ないし神社の幣殿で行われる舞いを見るだけだからかさ。親友の付き合いとして」

「まったたく……しょうがないな」

俺は、いやいやで承諾した。

「それで、待ち合わせ場所は？」

「え」と、6時ぐらいに須知神社の鳥居の前に来てくれ」

「分かった、6時に須知神社の鳥居の前だな」

「そうだ、それじゃまたあとでな」

そう言うつと久保は、電話を切った。

「はあ、めんどくさいな。でも、気晴らしに行ってみるか」

と言つて俺は、受話器を電話機に戻して自分の部屋に戻った。

久保との電話から数時間経ち、待ち合わせの6時。俺は、久保が待ち合わせの場所として指定した須知神社の鳥居の前にいた。

「遅いな」

と携帯電話に表示される時計を見ながら言う。この時間帯は、須知神社の幣殿で行われる神様たちに捧げる舞いを見るために大勢の人たちが神社に来る時間帯だった。須知神社の舞いは、結構有名で舞いを見るために県外から来る人もいるらしい。

「あいつ、自分から人を誘っておいて約束した時間に来ないってどういうことだ！」

まあ、あいつはいつも遅刻ばかりする奴だ、学校でもほぼ98%の確率で遅刻するからな。あいつの体内時計は、一体どうなっているのかと思ってしまう。

「そろそろ、舞いが始まる時間だな」

携帯電話の画面に表示されている時計を見る。

「……先に行くか」

と言つて、来ていない久保を置いて俺は、神社の幣殿に向った。

## 第一話（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の木曜日になります。

## 第二話

須知神社の幣殿へと続く参道の横には、いろいろな出店が出ている。俺は幣殿へ行く途中、サイダーを買って幣殿に向った。

幣殿に着くと、幣殿の周りは人出でいっぱいだった。そして、幣殿からは太鼓や笛の音が聞こえてきた。

「人が多いな、これじゃ舞いが見えないじゃないか」

と小声で呟いた。呟いた後、俺は何とかして人ごみの中をかいくくり幣殿の近くまでやってきた。幣殿ではすでに、神々に奉げる舞いのラストのあたりだった。結局、今年はラストの部分しか見えず舞いは終わったのであった。

「畜生、今年はろくに見えなかったぜ」

と言いながら、帰る人たちが多い参道を歩いているとポケットの中に入れていた携帯電話の着信音が鳴る。

「もしかして、あいつからか」

頭の中で電話してきた相手を予想し、携帯電話を見ていると

「やっぱり、あいつか」

電話をかけてきたのは、遅刻した久保だった。

「もしもし」

いつもより少しトーンが低い声で言う。

「あ、あのう……」

「何か言い訳があるなら、先に聞くぞ」

「……すまん、いろいろとあってな。それより今、お前どこにいる？」

「須知神社の参道を歩いているけど」

「それじゃ今から、須知神社の本殿の隣にある管理所に来てくれ。」

俺、今そこにいるからさ」

「分かった、すぐ行く。すぐ」

と言って電話を切った後、俺は今まで歩いて来た方とは逆の方へと歩き須知神社の管理所に向った。

久保と電話してから数分後、俺は神社の本殿の横にある管理所にやってきた。久保が指定した場所につくと、そこには俺との待ち合わせをすっぱかした久保がいた。

「お、やっと来たか」

俺の存在に気付き、俺の方を向く久保。

「やっと来たかじゃないだろうが！」

と久保の頭を叩くと久保の後ろには、巫女服を着た黒い髪が腰の辺りまでまっすぐ伸びている女の子がいた。

「おい久保、その子は？」

久保にその子のことを聞く。

「ああ、お前に会わせるのは初めてだったな」

そう言うとき久保は、その子の後ろに行きその子の両肩に手を置き。「こいつは俺の親戚の子で、2学期から俺たちの学校に転校してくる。秋沢玲子っていうんだ。須知神社で巫女をやっていて、今日の祭りの舞いを踊った人だ」

と、久保は秋沢さんの簡単な紹介をした。

「秋沢さんっていうの」

「初めまして、秋沢玲子つていいいます。よろしく」  
改めて秋沢さんが、あいさつする。

「よろしく、秋沢さん」

秋沢さんに頭を下げる。

「それじゃ私まだ、いろいろとやらなければいけないことがあるので。これで」

「ん？ まだ、なんかあるの？」

久保が秋沢さんに聞く。

「うん、ちょっといろいろとあってね」

「そっか、それじゃ明日空いている？」

「まあ、一応空いているけど」

「んじゃさ、明日三人で遊ぼうよ」

「私はいいですけど」



「よし、それじゃ明日の10時ごろ神社の鳥居の前で集合な」

と、久保が明日の集合場所と時間を言う。

「おい久保、まず人の予定を聞いてからそういうことを決めようぜ」

「おいおい何を言ってるんだ、俺はちゃんと秋沢の予定を明日のことを決めたじゃないか」

こいつは、本当のバカだと改めて思った。

「それじゃ、明日な。秋沢」

「また、明日」

と言って秋沢は、神社の本殿の中に入っていった。秋沢さんが行った後、俺と久保は人が少なくなつた参道を歩いていった。

「なあ」

「なんだ」

「お前、秋沢のことどう思った？」

久保が、秋沢さんのことについて聞いて聞いてきた。

「秋沢さんのことが。きれいな子だと思ったけど。見た目もよくて、性格もいい感じだったし」

そう俺が言うと、久保が

「もしかしてお前、秋沢に惚れたか」

そう言うと俺は、久保の頭を叩いて

「この、アホ！ そんな訳あるか！」

「え〜！ 本当は、秋沢みたいのがタイプなんでしよう」

「うるさい！ 遅刻した分際で、よくそんなことが言えるな」

「もう、そのことは水に流そう」

と会話しながら参道を歩き、そして鳥居のところまで一緒に歩いて鳥居のところまで久保と別れて俺は自宅に帰った。

## 第二話（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の木曜日になります。

### 第三話

翌日の12時ごろ、俺は久保と秋沢さんとの待ち合わせ場所の須知神社の鳥居のところに行って来た。鳥居のところにつくとまだ、そこには誰もいなかった。

「なんだ、まだ誰もいないのか」

と、俺は鳥居の回りを見渡して言う。そして、俺は鳥居にもたれるように立ち、二人が来るのを待った。

それから数分後、俺が友達にメールの返信を書いていた時

「ごめん、待った」

誰かの声だったので、携帯電話から顔を上げて見てみるとそこには「ごめん、ちよつと色々と準備していたら遅れちゃった」

昨日、初めて会った秋沢さんがいた。

「いや、待つてないよ。それより、久保の奴を知らないか？ メールしても返信が来ないんだ」

俺は、秋沢さんに久保のことを聞いた。まあ、遅刻の天才とうたわれる久保のことだ、おおよその見当はつくが、念のため秋沢さんに聞いてみた。

「ああ、久保ならさつきまで一緒に来ていたけどなんか忘れ物したとか言つて、私をおいて家に帰りました」

「はあ……」

俺は溜息をついた。予想とは少し違ったが、改めて久保は馬鹿だと思ひ知った。

「本当に、あいつは馬鹿な奴だ」

「久保なら、仕方ないよ。あの子、昔からあんな感じだから」

秋沢さんが、くすくすと笑いながら言う。

「久保の奴、昔からあんな奴だったのか？」

秋沢さんに、久保の事を聞く。

「うん、昔からね。忘れ物とか遅刻することが多かったの」

そう言いながら、秋沢さんは鳥居の前にある石段に腰を掛ける。  
「そうなんだ」

と、言いながら腰を掛けた秋沢さんの隣に、俺は腰を掛けた。  
「でもね。あの子、昔と比べたら結構マシな方になったんだよ」  
「あれでも、昔よりマシなの？」

「うん、昔だったら待ち合わせの時間を過ぎたら来ないっていうこと  
もあつたのよ」

「え！ マジで!?!」

俺は、秋沢さんから久保の衝撃的な過去を知った。

「本当よ。でも、昔と比べたら本当に変わったよ。あの子もこの村  
もそして私も……」

と、秋沢さんは真つ直ぐな視線で前を見つめていた。

「そうか……」

それしか言えなかった。そして俺も、秋沢さんが見つめる方をた  
だ見ていた。

「おやおや、お二人さん。なんか、いい感じになってますね」

と、家に帰っていた久保が俺と秋沢さんの肩に手を置いて言う。

「わ！ びっくりした！」

秋沢さんが、突然現れた久保に驚いた表情をして言う。

「あのな、お前来てるんだったら普通に来いよ」

「いいじゃん、こういうものも」

どうやら、こういうのは反省という言葉を知らないらしい。

「そうね、もう時間も結構経ってるし」

「秋沢の言うとおり、時間も経ってるし。早く、行こうぜ」

「やれやれ」

そう小声で呟き俺は立ち上がり、秋沢と久保の後を追った。

### 第三話（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の木曜日になります。

## 第四話

須知神社で久保と秋沢さんと合流した後、俺たち三人は仲良く話ながら村の中を回り歩いた。歩き出してから数時間後突然

「なあ」

俺の隣にいた久保が、俺に声をかける。

「何だ？ 久保」

「お前、夏休みの宿題終わったか？」

夏休みの宿題について聞いたきた。

「少しぐらいはやったけど、お前は？」

今度は、久保の宿題の進行状況を聞いてみた。まあ、どうせ宿題はやっていないだろうという予想は立つがここでは、あえて口には出さなかった。

「俺か？ 俺は、今お前が頭の中で思っている通りだぜ」

と、親指を立てて俺の方に向けて言う。

「それじゃ、何一つ手をつけていないんだな」

「もちろん、夏休みの宿題は最後に日にまとめてやるというのが決まりなんですね」

と、久保が自信たっぷり胸を張って言う。

「なあ秋沢さんは、宿題やってるのか？」

久保が、今度は秋沢さんに宿題の話振る。

「私は、夏にいろいろと神社の手伝いとかしなきゃいけないから、宿題は7月に済ませておこうと思ったけど、ちょっと分からない問題があつて、まだ終わってない」

「あれ？ 秋沢さん、夏休みの宿題もらっているの？」

確か、秋沢さんは一学期まで別の高校に通っていて二学期から俺たちが通っている学校に転校してくるはず。なのに、夏休みの宿題を持っていくことに疑問を抱いた。

「うん、7月にこっちに引っ越して来て学校に親と一緒に挨拶に行

「つたら、二学期から担任になる先生から『これ、夏休みの宿題ね。こつちに引越して来てまだ忙しいと思うけど、二学期から出遅れると後々大変だから頑張つてやってきて』って言われて宿題を渡されたの」

「なんて、災難な子だと思った。」

「災難だったね、秋沢さん」

「うん、でもみんなに追いつかないといけないから」

「秋沢さんが、不安そうな顔をして言う。それもそのはず、誰だつて転校するそついう不安事を抱えてしまう。」

「大丈夫だよ、きつと秋沢さんだつたらすぐに追いつけるよ。なあ、久保」

「そつだぞ、秋沢。俺たちの学校は、秋沢が通つていた学校よりレベルが低いからさ。大丈夫だ」

「果たしてそれは、補いの言葉になるのか。」

「ありがとう」

「さつきまで不安そうな顔をしていた秋沢さんが、にこやかに笑つて言う。」

「そつ言えば、秋沢さんつて今までどこの学校に通つていたの？」

「前は、土川高校に通つていたけど」

「え？ もう一回言つてくれる？」

「俺はもう一度、秋沢さんに聞く。」

「土川高校に通つていたけど。どうしたの？」

「『どうしたの？』じゃないよ。秋沢さん、土川高校に通つていたの？」

「うん。通つていたよ」

「俺は驚いた。土川高校と言えば、県内の中ではトップクラスのレベルを持っていて文武両道をモットーにクラブ活動や勉強では全国レベルに匹敵するとうたわれる高校だ。そこに通つていたという事は、秋沢さんは、俺たちと比べられないほどの実力を持っているという事になる。」

「な、ちよつと」

久保を呼びだし、秋沢さんには聞こえない声で

「秋沢さんって、何者？」

と、聞いた。

「お前がさつき聞いた通りだ。元は、土川高校に通っていたんだよ」

「じゃあなんで、そんな優秀校に通っていた人がこんな田舎に引越してきたんだ？」

「それは、俺も詳しくは知らないけど、なんか親の都合って言うていたような気がする」

「なんだよそれ！ お前、秋沢さんとは親戚なんだろ」

そう言っていると秋沢さんが

「あおう、二人とも何を話しているんですか？」

と、言ってきた。

「なんでもないよな、久保」

「うん、ちよつと宿題を写させてもらおうかなって」

さつきまでのことを、隠し事のようにする俺たち。

「そうなんだ。ねえ、今何時？」

秋沢さんが、今の時刻を聞いてきたので俺はポケットから携帯電話を取り出して画面に表示されている時刻を見る。

「4時をちよつと過ぎたぐらいだ」

「なあ、今日って花火大会があつたんじゃないのか？」

と、久保が言いだす。

「今日8時から、村の伊里浜でやるってお母さんが言った」

「んじゃ、今から伊里浜に行つて花火見るか？」

久保が、花火を見に行こうと提案する。

「うん、行こう」

秋沢さんが、楽しそうに言う。

「ねえ私、ちよつと着替えてきたいから。私の家の前で待っていてくれん？ ちよつと、汗をかいたから」

「ああ、分かった」



そう言いながら俺は、首を縦に振る。

「よし、じゃ今から秋沢の家に行くか」

そう言う事があって俺たちは今から、秋沢さんの家に行くことになったのであった。

#### 第四話（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の木曜日になります。

## 第五話

伊里浜で行われる花火大会に行く途中、秋沢さんが服を着替えてきたいということと一旦、秋沢さんの家に行くことになった。

「お前、秋沢さんの家に行ったことあるか？」

と、秋沢さんの後をついていく俺と久保。

「いや、まだ俺も行ったことがないんだ。こっちに引っ越してきたのが、7月だからさ」

「そうなんだ」

「だから、秋沢がどんな家に住んでるのか楽しみなんだよな」

久保が、顔をにやにやとさせながら言う。

「お前、なんかやましいことを考えてないか？」

「だってさ、神社で巫女さんをやってるんだぜ。そりゃ、豪勢な家に住んでるだろうな」

「はあ……やれやれ」

そう久保と話しながら歩いていっていると、秋沢さんはある一軒の屋敷の前で足を止める。

「それじゃ、ちょっとここで待ってて。すぐに、着替えてくるから俺たちにそう言っと、秋沢さんはその屋敷の中に入って行った。」

「これが、秋沢さんの家か」

秋沢さんの家は、江戸時代からありそうな雰囲気を感じさせている、俺たちの家とは比べられないほどの立派な武家屋敷だった。

「ほら、俺が言った通りだろう」

と、久保が俺の肩に手を置いて言う。

「そうだな。お前が、言った通りの家だな」

「だろう。俺の目に狂いはなかったぜ」

久保が、目をキラキラと輝かせて言う。まあ、俺も薄々と頭の端っことでは久保と一緒に豪勢な家に住んでいるんだろうなと思っただが、それをはるかに超える家だった。

秋沢さんが、自分の家の中に入って数時間が経った。俺たち二人は、近くにあった木の下で涼んでいた。

「秋沢さん、遅いな」

「汗かいたって言ってたし、風呂でも入ってるんじゃないのか」

「ああ、なるほど。たまには、久保もちゃんとたことを言うな」

「それ、どういう意味？」

「お前、普段から適当に物事を言ってるからさ」

「そうか」

と、俺たちは汗をダラダラと流しながら秋沢さんを待った。そして

「ごめん、待たせてごめんね」

ようやく秋沢さんが来た。

「秋沢さん？」

俺たちの目の前には、さっきまで普通の私服を着ていた秋沢さんが、水玉模様のかわいらしい浴衣を着ていた。

「秋沢。お前、今まで浴衣に着替えていたのか？」

と、久保が聞く。

「うん、せっかく花火を見に行くんだし」

「それなら、着替えるって言うてくれよ。もう、こっちは暑くて死にそうなんだよ」

そう言いながら久保は、魂が抜けたような感じ地面に倒れる。

「ごめん、着替えるのに時間が掛ってね。ちょっと、うちによって水でも飲んで」

そう言った瞬間、久保は目にも止まらない早さで立ち上がり

「では、そうさせてもらいます」

と、言い久保はダッシュで秋沢さんの家の中に入って行った。

「やれやれ」

そのあとに続くように、俺と秋沢さんは家の中に入って行った。

## 第五話（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、未定です。

## 第六話

家の中に入ると中は、まだ段ボールの箱とか引越しの時に使われたと思うものが大量にあった。

「ちよつと汚いけど、上がって」

と、秋沢さんが言う。

「お邪魔しまーす」

靴を脱ぎながら言う。そして、新築の臭いがする家の中に入ると秋沢さんは俺も和室に通して

「ちよつと、ここで待ってて。飲み物、取って来るから」

そう言つて秋沢さんは、部屋の襖を閉めて飲み物を取りに行った。秋沢さんが飲み物を取りに部屋から出て行った後、俺は特にすることもないので和室から見える庭を眺めていた。秋沢さんの家の庭は、日本庭園風に造られていた。

「きれいな、庭だな」

と、庭を眺めていたら和室の襖が開き

「この家、広すぎだぜ」

久保が、頭をかきながら入ってきた。

「お前、今までこの家の探索でもしていたのか？」

「ああ、秋沢が一体どんな家に住んでるか気になつてな」

「んで、どうだった？」

と、久保に見てきた感想を聞く。

「すごいぞ、この家は。こんなに部屋の数が多いい家なんて生まれて初めて見たぜ」

「ほう、そんなに部屋あつたのか」

「あつたぞ、結構」

「まあ、この家は外から見てもすごいからな」

「庭も広し、部屋も多いし、秋沢が羨ましいぜ」

「そうだな」

二人で、秋沢さんの家の感想を言っていると部屋の襖が開き、お茶が入ったコップを三つ乗せたお盆を持った秋沢さんが

「二人とも、お茶でいい？」

と、俺たちに聞きながら入ってきた。

「俺は、何でもいいぞ。秋沢」

「俺もだ」

秋沢さんの問いに答える俺たち。

「よかった」

秋沢さんはほっとした顔をして言い、お盆を机の上に置いて座った。

「しかし、今日は本当に暑いね」

と、言いながら氷が入ったお茶を飲む久保。

「そうだな、今日はいつもより暑いよな」

手で顔を煽ぎながらキンキンに冷えたお茶を飲む俺。

「どう、二人とも？ おいしい？」

お茶の感想を聞いてくる、秋沢さん。

「うん、おいしいよ。こんな暑い日には、もってこいのやつだよな。久保」

俺はお茶を飲みながら、秋沢さんの問いに答える。そして、今度は久保に聞く。

「キンキンに冷えてて最高だぜ！！」

と、久保が目をキラキラと輝かせて言う。外にいた時は完全に体から魂が抜けていたが、今までお茶のおかげで魂が体に戻ってきたらしい。

「もう、二人ともおおげさだよお茶くらいで」

秋沢さんが、クスクスと笑いながら言う。

「しかし、秋沢。お前、本当に浴衣似合っているな」

と、久保が今度は秋沢さんが着ている浴衣の話振る。

「うん、似合ってるよ。秋沢さん」

秋沢さんの浴衣姿は、昨日の夜に見た巫女姿とはまったく違う魅

力を感じる。

「そ、そう。ちょっと、嬉しいな」

浴衣の袖で口を隠しながら言う。

「本当だよ、秋沢さん」

「ありがとう」

と、三人で仲良く話していると久保が残っていたお茶を一気に飲み干して

「そろそろ、伊里浜に行こうぜ。あそこ、早く行かないといい場所がなくなるからな」

「そうだな、そろそろ行くか」

「そうね、そろそろ行きましょうか」

と、言って俺たちは秋沢の家から出て伊里浜に向った。



## 第六話（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は、来週の木曜日になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6585v/>

---

夏の風

2011年10月13日16時54分発行